

# 『帰藏』の伝承に関する一考察

附、『帰藏』佚文輯校

川村 潮

## 序論

近年における出土文字資料の増大は、これまで大局的・政治的な見地から俯瞰せざるを得なかった中国古代社会に、より具体的・日常的な視点から接近することを可能にした。わけでも「數術」に分類される史料は、これまで非科学的なものとして等閑視されていたが、過去の人々の日常に深く関わり、歴史の表層には現れにくい風俗・慣習を残すものであるだけに、彼らの心性を明らかにするうえで非常に重要なものといえる。

そこで注目されるのが『帰藏』である。『帰藏』は『周礼』春官大卜条に、

(大卜)三易の灋(法)を掌る。一に曰く連山、二に曰く歸藏、三に曰く周易。其の經卦は皆八、其の別は皆六十有四なり。とあり、後漢・鄭玄『易贊』及び『易論』に

夏に曰く連山、殷に曰く歸藏、周に曰く周易。

『帰藏』の伝承に関する一考察

とあることから、旧注では『周易』に先行する殷代の易法、あるいはそれを記した典籍のこととされる。この『帰藏』は『隋書』卷三二経籍志一(以下隋志)に、

『歸藏』十三卷 晋太尉參軍薛貞注

と著録されているが、唐初以来、このテキストは専ら魏晉期の偽作とされてきた。<sup>①</sup>

この千年来の定説を一変させたのが新たな出土文字資料の発見である。一九九三年三月、湖北省江陵县(当時)の王家台一五号秦墓から出土し、「易占」と仮称された竹簡群が、初歩的な検討によって『帰藏』佚文の一部とほぼ一致することが明らかになったのである。<sup>②</sup>この発見によって、『帰藏』を魏晉期の偽書とする説は否定される。『帰藏』は殷代の易の一端を明らかにするものとして大いに注目を集めることになった。というのも、一般に「王家台秦簡『帰藏』」と呼ばれるこの竹簡群は「易」をその占法原理とするが、その内容は『周易』とは全く異なっていたからである。

このように、『帰藏』は戦国以来の長い歴史をもち、その真偽も

含めて様々に理解されてきた典籍である。したがって、その受容の歴史を明らかにすることは、人々の『帰藏』に対する理解、ひいてはその根本にある「數術」に対する觀念を通時的にたどることを可能にしよう。しかしながら、先学の多くは「易占」の内容に着目するあまり、『帰藏』がどのように理解されてきたかを軽視しがちで、これに対する検討はいまだ不十分なように思われる。『帰藏』の伝えられてきた歴史を明らかにすることなくして、「易占」『帰藏』がいかなるものであるか（正確には、いかなるものにとらえられていたか）を明らかにすることは難しいのではなからうか。そこで本稿では、「易占」そのものの検討や『帰藏』の真偽を論定することは措き、ひとまずは初步的な検討として、『帰藏』がどのように伝えられ、理解されてきたかをあとづけてみることにしたい。そうすることで、戦国・魏晉における「數術」の一端も明らかになると思われるからである。

## 一、『帰藏』伝承の過程

「易占」の発見によって『帰藏』を魏晉期の偽書とする説は否定されたが、いまだ『帰藏』がどのように伝承されてきたかについては不明瞭な箇所も多い。まずは『帰藏』の伝承の過程について整理しておく必要がある。

先に述べたとおり、『帰藏』とはほぼ同一の内容が戦国秦簡「易占」

に見えている。しかし、その標題簡は発見されておらず、<sup>(4)</sup>はたしてこの竹簡群が『帰藏』という名であったかどうかは定かではない。確実に典籍とみなせる『帰藏』の名は、後漢・桓譚『新論』にはじめて見える。その正経篇に、

『歸藏』、四千三百言なり。<sup>(5)</sup>

『歸藏』、太卜に藏せらる。<sup>(6)</sup>

とあり、<sup>(7)</sup>『帰藏』という典籍が後漢の太卜府に所藏されていたことがわかる。後漢・張衡『靈憲』には、

羿、無死の藥を西王母に請い、姮娥、之を竊みて以て月に奔る。

將に往かんとして之を有黄に枚筮せしむ。有黄、之を占いて曰く、「吉。翩翩たる歸妹、獨り將に西行せんとし、天に逢いて晦芒するも、驚く母かれ恐るる母かれ、後其れ大いに昌えん」と。

とあり、<sup>(8)</sup>この文は用語・形式からいって『帰藏』の佚文とみられるが、この『靈憲』が著述された経緯について、『後漢書』卷五九張衡列伝に、

安帝、衡の術學を善くするを雅聞し、公車もて特に徴して郎中に拜し、再び遷して太史令と爲す。遂に乃ち陰陽を研覈し、璇機の正を妙盡して、渾天儀を作り、『靈憲』『筭罔論』を著す。

とある。ここでは張衡が『靈憲』を著すに先立ち太史令となったことが記されているが、『統漢書』百官志二の本注に

太卜令有り、六百石。後省きて太史と并す。

とあるように、太史令はもとの太卜令をあわせたものである。ここから、桓譚が「太卜に藏せらる」とした『帰藏』は、太卜令が省かれた際に太史府に移管され、後漢中期に太史令となった張衡が目にしたと推測できる。

ところが、『新論』とはほぼ同時期に纂修された宮中の蔵書目録である『漢書』卷三〇芸文志（以下漢志）に『帰藏』の名は見えず、このことは古くから大きな問題とされてきた。

そこで近藤浩之氏は、『帰藏』という名は漢志の成立以後につけられたもので、当時そのような名をもつ書は存在していなかったため、漢志に著録されなかったと推定されている。<sup>10</sup> 程二行・彭公璞両氏も当時『帰藏』という書はなく、漢志の著録家に著録されている『周易』三八巻が、漢志の成立後に分立して『連山』『帰藏』『周易』の三易となったとされている。<sup>11</sup>

確かに「易占」の標題簡は現在のところ発見されておらず、はたしてこの竹簡群が『帰藏』という名であったかどうかは定かではない。また佚文のうち、『帰藏』であることが明示されているのは晉代以後の例に限られており、これらの点からすれば近藤氏、程・彭両氏の指摘は説得力がある。とはいえ、漢志に著録されていないということを当時その書が存在しなかったと理解してよいのだろうか。というのも、「日書」などのように、出土文字資料の中には漢志に著録された典籍と同定できないものもあり、漢志が当時における典籍を全て網羅していたとは考えにくいからである。

『帰藏』の受容されていく過程からみて、漢志の粉本である『七略』成立時に「易占」が『帰藏』と呼ばれておらず、後世になって『帰藏』に仮託された可能性は十分に考えられる。しかし、その具体的な要因・過程が明らかでない以上、漢志に著録されていないとはいえ、戦国から秦漢にかけて『帰藏』は伝えられてきたと考えるのははかない。

降って晉代になると、『帰藏』の存在が確実視される。隋志によると、『帰藏』は『晉中経』に著録され、太尉參軍であった薛貞という人物によって注釈がほどこされたことがわかる。

一方、『旧唐書』卷四六経籍志上（以下旧志）に

『歸藏』十三卷 殷易、司馬膺注

とあり、『新唐書』卷五七芸文志一（以下新志）にも

司馬膺注『歸藏』十三卷

とあるように、薛貞注以外にも司馬膺注が存在していたようである。ところが清・羅士琳等『旧唐書校勘記』卷二八には

殷易司馬膺注 聞本、注を撰に作るは、誤りなり。沈本、此條の前に「連山」十卷。司馬膺注の八字有り、「新書に従いて増す」と云う。按ずるに舊書、『連山』を闕き膺を以て『歸藏』に注すとするは、疑らくは誤りならん。按ずるに『隋書』經籍志に云く、「歸藏十三卷。晉太尉參軍薛貞注」と。疑らくは此の志も殷易の下に本と「晉太尉參軍薛貞注」の七字有り、『歸藏』の注に係らん。司馬膺注の上に本と「夏易」の二字有り、

『連山』の注に係らん。傳寫する者、脱佚舛錯し、遂に通ず可からざるに致るのみ。

とあり、この案語に従えば、司馬膺は『連山』に対して注をつけたということになる。

ところが、敦煌文書(P三六三六)の「不知名類書甲」中に、

『歸藏』白雲有り、蒼梧自り出でて大梁に入る。

とあり、その注に、

大梁、今の汴州是なり。梁王の昌盛たるに當たる。

とある。この類書中には自注が見えないことから、この文は注を含めて引用されたと考えられるが、ここに見える「汴州」は『魏書』

卷一〇六地形志中に「汴州。蕭衍置き、魏、之に因る。汴城に治す」とあるように、南朝梁の武帝(蕭衍)の時におかれたものであるから、この注は西晉の薛貞がつけたものとはみなせない。したがって、『歸藏』には薛貞・司馬膺の一注があったと考えられる。

佚文の出典からすると、南宋・李過『西谿易說』が引くものを最後に独自の佚文は見えなくなるから、この後しばらくして、おおよそ宋元の際に『歸藏』が散佚してしまつたと見るのが妥当であろう。ただし、明・陳第『世善堂藏書目』に『歸藏』三篇が著録されており、同じく陳第の手になる『毛詩古韻考』にも『歸藏』が引用されていることからすれば、『世善堂藏書目』が編纂された明の万暦年間あたりまで『歸藏』が残存していた可能性もある。

## 二、『歸藏』をめぐる議論

次いで『歸藏』がどのように理解されてきたかを検討してみよう。『歸藏』をめぐる、最も議論されてきたのは何よりもその真偽問題であるが、『歸藏』に関するこれまでの議論は、清・朱彝尊『經義考』卷二・卷三、および『玉函山房輯佚書』卷一におおよそ網羅されている。これらによれば、『歸藏』の真偽問題のあらまはは以下のごとくである。

隋志

『歸藏』、漢初に已に亡ぶ。按ずるに『晉中經』之を有すも、惟載卜筮を載すのみにして聖人の旨に似ず。本卦の尚存するを以て、故に取りて周易の首に貫ね、以て殷易の缺に備う。

孔穎達

世に有る『歸藏』は僞妄の書にして、殷易に非ざるなり。(『春秋左氏伝』襄公伝九年正義)

歐陽修

周の末世、夏商の易已に亡び、漢初に『歸藏』有りと雖も已に古經に非ず。今書三篇、究むる可くも莫きなり。(『崇文總目叙録』)

劉炎

或るひと問う、「『連山』『歸藏』の眞偽は」と。曰く、「漢志、『連山』を録さず、唐志、則ち之有り。漢志、『歸藏』を録さず、『晉中經』・隋・唐志、則ち之有り。昔無くして

今有り、其の偽なること知る可し。況んや其の言の經ならざるをや。〔通言〕卷一〇）

鄭樵

『連山』亡ぶるなり。『歸藏』、隋に薛貞注十三卷有り、今存る所の者は初經・齊母・本著三篇のみ。占筮の事を言い、其の辭は質にして、其の義は古し。後學、文ならざるを謂爲て之を棄つるも、獨り後人の能く此の文を爲れるやを知らざるのみ。〔通志〕卷六三芸文略）

馬端臨

『連山』『歸藏』、乃ち夏・商の易なれば、本『周易』の前に在り。然るに『歸藏』は漢志に之無く、『連山』は隋志に之無し。蓋し二書、晉・隋間に至りて始めて出でん。而して『連山』の劉炫の僞書に出づるは、『北史』之を明言す。『歸藏』の書爲るを度るに、亦此の類なるのみ。〔文獻通考〕卷一七五）

吳激

世俗傳うる所の『歸藏』易は、僞書なり。〔易纂言〕卷首）

吳萊

『歸藏』三卷、晉薛貞注。今或いは他書に雜見す。頗る焦贛『易林』に類し、古易に非ざるなり。〔淵穎集〕卷七・三墳弁）

何喬新

隋經籍志に『歸藏』十三卷有り、劉光伯の上意する所に出づ。甚だ淺陋…〔中略〕…所謂坤の以て之を藏するとは即ち歸藏の遺意なり。〔椒丘文集〕卷一）

胡心麟

『七略』、『歸藏』無く、『晉中經簿』、始めて此の書有り。隋志之に因りて此書を稱するに、「惟卜筮を載すのみ、聖

人の旨に類せず」と。蓋し唐世固より其の僞を疑うらん。〔四部正譌〕卷上）

楊慎

『連山』、蘭臺に藏せられ、『歸藏』、太卜に藏せらる。桓譚『新論』を見るに、則ち後漢時『連山』『歸藏』の猶存するがごとし。藝文志に其の目を列せざるを以て之を疑う可からず。〔丹鉛余録〕卷一四）

朱彝尊

按ずるに『歸藏』隋時猶存す。宋に至るも猶初經・齊母・本著三篇有り。其れ傳に見え、注に引く所の者は…〔中略〕…の如し。凡そ此の辭、皆古奧なり。而るに孔氏正義の『歸藏』僞妄之書」と謂うは、亦未だ盡くは然らず。『三墳書』の歸藏易を以て氣墳と爲し、其の爻卦大象に「天氣歸地氣藏。木氣生、風氣動、火氣長、水氣育、山氣止、金氣殺」と曰うが若きは、各之が傳と爲せば則ち傳・注の引く所と較ぶるに、大いに倫ならざるなり。隋志『歸藏』漢初已亡」と謂う、故に班固藝文志載せず。又『晉中經簿』有之」と謂い、斯れ景純、之に援くるを得て以て山經を釋するなり。〔經義考〕卷二）

徐善

『歸藏』の亡ぶるや久しき。之を『古三墳』及び司馬膺・薛貞の書に求める者は失の譌有り。①

これらの諸説を整理すると、おおむね以下のようになる。真書説の根拠は、「本卦の尚存する」こと、卦辭が『周易』と異なって

いるが、一部の語句では同一であること、その文が古義をもち質朴であることなどが挙げられている。一方、偽書説は、眞の『帰蔵』が周末あるいは漢初に散佚していること、聖人のころばせとは思われないこと、漢志に著録されていないこと、焦贛『易林』に類似していること、の四点を論拠とし、これが殷代の易書とはみなしがたく、魏晉期の偽作であろうとする。

ここで注目したいのは、真偽いずれの立場においても「帰蔵易」が殷代に存在していたこと自体は疑われていない、という点である。隋志は、薛貞注『帰蔵』が偽書であることを疑いつつも、これに「本卦」があることから殷易の欠を補うことができるという。つまり殷代に「帰蔵易」は確かに存在したが、現存する薛貞注『帰蔵』はそれそのものではなく、殷の「帰蔵易」を参考にして後世に作られた典籍であり、ゆえに「殷易の缺」に備えることができるのである。欧陽修の言も散佚した時期を漢初でなく周の末世とするが、これとほぼ同様の主旨であろう。孔穎達・呉澂も「世に有る」・「世俗の傳うる所」と限定しているように、かつて存在していた「帰蔵易」まで疑うものではない。呉萊が「古易に非ず」といい、何喬新が「甚だ淺陋の書」と評し、徐善が「之を譌に失す」と断ずるものもあくまで隋志に著録された薛貞注『帰蔵』についての理解にすぎないのである。

それでは、そもそもこの「殷代に帰蔵易が存在した」という前提はどこからきたもののだろうか。このことについては、近藤浩之

氏の指摘が非常に示唆的である。すなわち、氏は「劉歆が『周官経』を『周礼』として杜子春・鄭興・鄭衆・賈逵などに業を授けてはじめて、その中に見える「帰蔵」が「連山」「周易」とともに「三易」の一つとして注目され、そもそも「連山」「帰蔵」とは何かが議論されるようになった」とされる<sup>18</sup>。したがって、『帰蔵』を殷易とするのはあくまで『周礼』の記述に対する解釈なのであって、後世『帰蔵』と呼ばれる典籍とはもともと関係がないということになる。とはいえ、残念なことに近藤氏はそのように考える根拠を明示しておられない。また、『帰蔵』を殷易とする理解が『周礼』の解釈によるものとするのであれば、その内容から見て「殷易とは別物」と考えられる『帰蔵』は、なぜ後世に殷易と考えられるようになるのだろうか。

### 三、『帰蔵』殷易説の論拠

そこで改めて『周礼』春官大卜条の記述について検討する必要がある。そこでは「帰蔵」が「三易の法」のひとつとして「周易」の前に挙げられているものの、これがいつの時代のものかまでは言及されていない。これについて、前漢末、劉歆から『周礼』の学を受けた杜子春は、

連山は伏羲、歸蔵は黄帝なり。  
とする。<sup>19</sup>『漢書』卷二〇古今人表・上中仁人欄に「歸臧(蔵)氏」

とあり、『世譜』に、

神農、一に連山氏と曰い、亦列山氏と曰う。黄帝、一に歸藏氏と曰う。

とあることを参考にすると、杜子春は「歸藏」を黄帝の別名とし、『歸藏』をその当時の易法と考えていたようである。

だが『漢書』卷二〇古今人表には上上聖人欄に「黄帝軒轅氏」、上中仁人欄に「歸藏氏」の名が見えており、「黄帝」と「歸藏氏」は別人とされていたかのようなのである。このことについて清の梁玉繩は、はじめ黄帝が炎帝に封建された時に歸藏氏と称し、彼が帝位に就いた後もその一族が跡を継いで歸藏氏を称していたと理解する。<sup>(21)</sup>その是非は明らかにしがたいが、いずれにせよ、杜子春・班昭は「歸藏氏」を上代の人物とし、「歸藏」を黄帝当時のものとみていたようである。

したがって、後漢・王充『論衡』正説篇に、  
歸藏氏の王、河圖を得。殷人、之に因みて『歸藏』と曰う。

とあるものが、「歸藏」をはじめて殷と関連づけたものということになる。ここで「河圖」が見えていることに注目したい。『河図』については『漢書』卷二七・五行志上に、

劉歆以爲らく、慮羲氏、天を繼ぎて王たり。河圖を受け、則ち而して之を畫く、と。

とあり、これが八卦の根源とされるのは前漢末の劉歆によってである。したがって、王充の説も劉歆の理解を継承したものであり、

前漢末から後漢初にかけての時期の理解を反映したものと考えられる。<sup>(22)</sup>

この王充の説をふまえてか、後漢末の鄭玄も『歸藏』を殷代の易とする。『周礼』春官大卜条の疏に、

趙商…(中略)…敢て問う、「杜子春の何に由りて之を知るか」と。鄭荅えて云く、「此の數者は明文無きに非ざるも、之を改むるに據無し。故に子春の説を著すのみ。近師、皆以て夏・殷・周と爲す」と。

とある。やや文意を汲みがたい箇所もあるが、鄭玄は杜子春説にも一定の根拠を認めたくえで、「近師」に従い『連山』『歸藏』『周易』を夏・殷・周のものと理解したことをいうようである。この「近師」が直接に王充を指すかどうかはわからないが、杜子春をはじめとする『周礼』の解釈をふまえていることは疑いない。

殷易『歸藏』という理解が『周礼』を起点としていることは、『周易』を除く「三易」に関する語(連山・歸藏・三易・夏易・殷易など)が前漢末期以前の史料中には全く見られず、「殷易」に関する理解が前漢までの易説と大きく異なっていることからわかる。すなわち、『史記』卷四周本紀に、

(西伯) 其れ羨里に囚わるるに、蓋し易の八卦を益して六十四卦と爲す。

とあるように、「重卦」して六十四の卦を考案したのは文王であるとされるのに対して、先に引いた『周礼』春官大卜条には

(二易の法) 其の別は皆六十有四なり。

とあり、王充の説に従えば、それ以前の夏易・殷易の時点で「重卦」がされていることになる。<sup>24)</sup> いわゆる「加上説」の観点からいっても、『周礼』の記述は前漢の「文王重卦」説をふまえた晩出のものということになる。

したがって、「殷代に帰蔵易が存在した」という前提は、『帰蔵』の内容にもとづくものではなく、『周礼』の記述とそれをめぐる解釈にもとづくものであったことがわかる。つまり、彼らにとって、殷代には『周易』に先行する「帰蔵易」なるものが行われ、それに関する『帰蔵』という典籍があった、ということは經典である『周礼』とその注釈という権威によって支えられた、いわば自明の事実だったのである。

さて、『帰蔵』を殷易とする説が『周礼』の理解から生まれたのであれば、後に偽書の証左とされるような種々の問題点があるにも関わらず、なぜ『帰蔵』は殷易とみなされたのだろうか。単に『周礼』の権威のみがそれを盲信させたとは考えにくい。彼らにとって『帰蔵』それ自体に何か「殷易」たるべき証左があったのではなからうか。

そこで「易占」出土以後の研究に目を向けてみると、『帰蔵』を殷易(ないしその占法を留めたもの)とする論者は、いずれも卦名・卦辞の異同に着目していることに気づく。邢文氏・林忠軍氏・梁章弦氏らは、いずれも『帰蔵』の卦名が簡本・帛書本「周易」と近く、

さらにそれよりも古いという理解を根拠に、「易占」『帰蔵』を殷易と考え、さらには『帰蔵』と『周易』の卦辞に異同が見られることを挙げて、先行する『帰蔵』を『周易』が踏襲したためと解されている。<sup>25)</sup> これら諸氏の説は、薛貞注『帰蔵』著録の理由について隋志に、

本卦の尚存するを以て、故に取りて周易の首に貫ね、以て殷易の缺に備う。

とあり、『西谿易説』原序に『帰蔵』の卦名と『周易』のそれとが三分の二あまりが近似し、一部の卦辞に同一の語が見られることか<sup>26)</sup>ら、

文王の重易は商易の舊に因るに止む。…(中略)…卦名は商を用い、卦辭も亦商を用う。…(中略)…皆商易の舊文に因る。

とするものをふまえてのものであろう。

すなわち、卦名・卦辞の異同を主要な論拠として、『周易』と『帰蔵』の連続性を見ているのである。「易」を成立させる根本的な要素が六十四の卦とそれに付随する卦辞であることに異論はなからうが、その部分が両者に共通し、かつ相違しているということが『帰蔵』を殷易と見る重要な根拠とされていたのである。

## 結論

これまで検討してきたことをふまえ、『帰蔵』がどのように伝承



され、その理解がどのように変遷してきたかについて概観すると、おおよそ次のようになる。現在『帰蔵』とされる典籍の起源は、王家台秦簡「易占」の出土によって、戦国後期にまで遡ることが明らかとなった。それ以降、この書がどのように伝えられてきたかは判然としないが、後漢から晋代にかけての多くの佚文から推測するに、戦国から後漢までの間も、大きな変化もなく伝えられてきたようである。晋から唐にかけては、『晋中経簿』をはじめいくつかの書目にも著録され、また晋の薛貞や司馬膺によって注がつけられているように、『帰蔵』が典籍として流布していたことが窺える。しかし、宋初には三篇を残すのみとなり、やがて明初にかけて散佚してしまう。

『帰蔵』がこのような歴史をたどってきた背景には、これを伝えてきた人々の『帰蔵』に対する理解が大きく影響している。戦国時代において「易占」がいかなる書とされていたかは今後詳細に検討する必要があるが、「災異占」・「日書」といった占書や、殷子・算木・式盤などの占具とともに出土していることからすると、少なくともこれが馬王堆帛書「周易」のような思想書としてではなく、(後世の通書のような)実用的な数術の典籍として考えられていたことがわかる。『左伝』に『周易』とは異なる占辞が見られること、葛陵楚墓・包山二号墓・天星観一号墓などから出土した卜筮祭祷簡に「数字卦」があつて『周易』の卦名・卦爻辞の存在が確認できないことからすると、かつては『周易』と異なる卦辞をもつ「易」が

存在していたと考えられるが、おそらくは「易占」もそのような易の一派と考えられる。ところが、前漢末から後漢初にかけて、『周礼』春官・大卜条に「帰蔵」の名が見えることを受け、「帰蔵」は『周易』よりも古い、黄帝あるいは殷易であると解釈されるようになる。後漢末の鄭玄がこの解釈を継承して諸經典に注釈を施すと、その説を前提に「易占」は殷易「帰蔵」として理解されるようになった。この「帰蔵」を殷易とみなす理解は、『周礼』に見える「帰蔵」という語に対しての理解から派生したものであつて、現在「帰蔵」と呼ばれている書の内容とはほとんど関係がなかった。このような矛盾を超え、『帰蔵』が殷易として理解された、その直接的な理由は卦名と卦爻辞の異同にある。「易」の骨子が六四の卦とそれに付随する卦爻辞であることは贅言を要さないが、その根本となる部分が『周易』と「帰蔵」とで異なっているということは、『帰蔵』の特殊性を示すものとして常に問題とされるところである。隋志の「本卦の尚存す」という評言に始まり、近年の諸論考にいたるまで、殷易「帰蔵」をいうものがいずれも『周易』と「帰蔵」の卦名の差異に注目していることは、この理解を裏付けるものであろう。

さて、『帰蔵』がこのような伝承を経てきたとすれば、それは単なる偽書などではなく、殷易に仮託された「擬作」ということになる。その場合、『帰蔵』を殷易に仮託する歴史的要因はどこにあったのか、といった疑問が残る。本稿で論じきれなかったこの問題については稿をあらためて検討することにした。

附、「帛藏」佚文輯校<sup>(27)</sup>

〔六十四卦〕

- 1 乾 屯 蒙 渙 訟 師 比 小毒畜 履 泰 否 同人 大有 蠱 大過 頤 困 井 革 鼎 旅 豐 小過 林禍 觀 萃 稱 僕 復 母亡 大毒畜 睽 散家人 節 夬 蹇 荔員 誠 欽 恒 規 夜 巽 兌 離 犖 兼 分 歸妹 漸 晉 明巨 岑霽 未濟 遯 大壯 蜀 馬徒
- ※『西谿易說』原序(馬)<sup>(28)</sup>
- 2 小毒畜卦 其丈人。  
※『漢上易叢說』(馬)
- 3 屯卦 屯膏。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 4 師卦 帥師。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 5 歸妹卦 承筐。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 6 漸卦 取女。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 7 明巨卦 垂其翼。  
※『西谿易說』原序(馬)

〔初經〕

- 8 初乾·初輿坤·初艮·初兌·初犖坎·初離·初蠱震·初巽。  
※『漢上易卦圖』卷上·『路史』卷一四注(嚴洪林)·『路史』發揮一(嚴洪)
- 9 初乾、其爭言。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 10 初兌、求息得酒、言語譎譎。  
※『西谿易說』原序(馬)·『一切經音義』卷二四·『玉篇』卷二七
- 11 初坤、榮榮之華、繁繁之實。  
※『西谿易說』原序(馬)·『玉篇』卷二一
- 12 初巽、有鳥將來、而垂其翼。異值鶉尾、故稱飛鳥也。  
※『漢上易傳』卷九·『西谿易說』原序(馬)
- 13 初艮、徼徼鳴狐。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 14 初犖、為慶身不動。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 15 初離、離監監。  
※『西谿易說』原序(馬)
- 16 初蠱、燁若雷之聲。  
※『西谿易說』原序(馬)

〔鄭母經〕

17 翠請無死之藥於西王母、昔姮娥竊之以奔月。將往、枚筮之於有黃。有黃筮之曰、「吉。翩翩歸妹、獨將西行、逢天晦芒、母驚母恐、後其大昌」。

※『統漢書』天文志注(王嚴林)・『文心雕龍』卷四・『文選』卷一三

注(王嚴洪林馬)・卷五七注(嚴馬)・卷六〇注(嚴洪)・「不知名

類書甲」P三六三六・『北堂書鈔』卷一五〇(嚴)・『太平御覽』卷

九八四(王洪馬)・『緯略』卷六

18 昔者羿善射、彈十日、果彈之。

※『山海經』海外東經注(王嚴洪林馬)・『文心雕龍』卷四・『春秋左

氏伝』襄公四年正義(嚴洪馬)・『論語』憲問疏(嚴洪)・『孟子』

梁惠王疏(嚴洪)・『尚書』五子之歌正義(嚴洪馬)・『楚辭』天問

補注(嚴)・『尚書精義』卷一三・『路史』卷二〇注・『四六標準』

卷一一注・『通鑑外紀』卷二注

19 昔者女媧筮張雲幕、而枚占神明。占之曰、「吉。昭昭九州、日月代極、平均土地、和合四國」。

※『初學記』卷二五(王嚴洪林)・『北堂書鈔』卷一三二(嚴洪)・

『太平御覽』卷七八(王嚴洪林馬)・『事物紀原』卷七・『海錄碎事』

卷五

20 殷王其國常母谷。

※『周禮』春官大卜疏(嚴洪林馬)・『路史』發揮(嚴洪馬)

21 明夷曰、昔夏后啓筮乘龍而登于天、而枚占臯陶。臯陶曰、「吉。

而必同與神交通、以身爲帝、以王四卿」。

※『博物志』卷六(馬)・『山海經』海外西經注(王嚴洪林馬)・『山

海經』大荒西經注(嚴林馬)・『太平御覽』卷八二(林)・『太平御

覽』卷九二九(王嚴洪馬)・『路史』卷一四注(林)・卷三三注(嚴

洪)

22 昔穆王天子筮出於西征、不吉。曰、「龍降於天、而道里脩遠、

飛而中天、蒼蒼其羽」。

※『太平御覽』卷八五(王嚴洪林馬)

23 昔黃神與炎神爭鬪涿鹿之野、將戰筮於巫咸。巫咸曰、「果哉而

有咎」。

※『太平御覽』卷七九(王嚴洪馬)・『路史』卷三三注(嚴洪林)・卷

一三三注(嚴洪馬)

24 昔夏后啓筮享神於大陵、而上釣臺。枚占臯陶曰、「不吉」。

※『水經注』潁水注・『初學記』卷二四(嚴洪馬)・『北堂書鈔』卷

八二(嚴洪)・『太平御覽』卷八二(王嚴洪林馬)・卷一七七(王嚴

林)

25 昔者桀筮伐唐而枚占於癸惑。癸惑曰、「不吉。不利出征、唯利

安處。彼爲狸我爲鼠、勿用作事、恐傷其父」。

※『太平御覽』卷八二(王嚴洪馬)・卷九二二(嚴洪馬)・『博物志』

卷八(林馬)・『路史』卷二四注(林)・卷三三(嚴洪)

26 昔者夏后啓筮享神於晉之墟、作爲臺於水之陽。

※『太平御覽』卷一七七(洪馬)・『初學記』卷二四(王洪)・『芸文

類聚』卷六二(嚴洪)、『文選』卷四六注(王嚴洪林馬)

27 昔者豐隆箠將雲氣、而結核之也。得大壯卦、遂爲雲師。

※『北堂書鈔』卷一五〇(嚴洪)、『穆天子傳』卷三注(洪)

28 昔者河伯筮與洛戰、而枚占昆吾。占之、「不吉也」。

※『初學記』卷二〇(王嚴洪)

29 昔穆王子筮卦於禹強。

※『經典釈文』莊子音義上注引崔譔注(王嚴洪馬)、『路史』卷一四

(嚴洪)

30 昔夏啓筮徙九鼎、啓果徙之。

※『博物志』卷六(林馬)、『路史』卷三(嚴洪)

31 昔舜董登天爲神、枚占有黃。龍神曰、「不吉」。

※『博物志』卷六(林馬)

32 武王伐殷、而枚占耆老。耆老曰、「吉」。

※『博物志』卷六(林馬)、『路史』卷一四注(王嚴洪林)

33 昔鯀筮治洪水、而枚占大明。曰、「不吉。有初無後」。

※『博物志』卷六(林馬)、『路史』卷一四注(林)、『路史』卷三

(嚴洪)

(本著篇)

34 耆末大於本爲上吉、蒿末大於本次吉、荆末大於本次吉、箭末大

於本次吉、竹末大於本次吉。耆一五神、蒿二四神、荆三三神、

箭四二神、竹五一神。筮五犯皆臧五、筮之神明皆聚焉。

※『太平御覽』卷七二七(王嚴洪林馬)、『博物志』卷六(馬)

35 耆二千歲而三百莖、其本以老故知吉凶。

※『博物志』卷六(馬)

36 筮必沐浴齋戒、食香每日望浴。耆必五浴之浴。亦然。

※『博物志』卷六(馬)

37 曰、舊言之擇、新言之念。

(齊母經)

38 瞿。有瞿有觚、宵梁爲酒尊於兩壺。兩楸飲之三日。然后鯀土有

澤、我取其魚。

※『爾雅』釈畜注(嚴洪馬)、『爾雅』釈畜疏(嚴洪林馬)、『爾雅翼』

卷三

39 有一星出于頭山之野、三月烏出必以風雨。

(啓筮經)

※『玉燭寶典』卷三

40 共工、人面蛇身朱髮。

※『山海經』大荒西經注(王嚴洪林馬)、『芸文類聚』卷一七(嚴洪)

※『太平御覽』卷三七三(嚴洪)、『通鑑外紀』卷一注、『通志』卷

二五、『路史』卷一一注(嚴洪馬)

41 帝堯降二女爲舜妃。

※『周礼』春官大卜疏(王嚴洪林馬)

42 麗山氏之子鼓、青羽人面馬身。

※『山海經』西山經注(王嚴洪林馬)・『路史』卷一三(嚴洪)・『路

史』卷一三注(王)

43 羽民之狀、鳥喙赤目而白首。

※『山海經』海外南經注(王嚴洪林馬)

44 空桑之蒼蒼、八極之既張。乃有夫羲和、是主日月職、出入以爲  
晦明。

※『山海經』大荒南經注(王嚴洪林)・『路史』卷三

45 瞻彼上天一明一晦、有夫羲和之子、出于暘谷。

※『山海經』大荒南經注(王嚴洪林馬)

46 昔彼九冥。是與帝辯同宮之序。是謂九歌。

※『山海經』大荒西經注(王嚴洪林馬)

47 不得竊辯與九歌以國于下。

※『山海經』注(王洪林馬)

48 滔滔洪水、無所止極。伯鯀乃以息石・息壤以填洪水。

※『山海經』海內經注(王嚴洪林馬)・『北堂書鈔』卷一六〇(嚴洪)

49 鯀死三歲不腐、剖之以吳刀、化爲黃龍。

※『山海經』海內經注(王嚴洪林馬)・『路史』卷二一(王嚴洪)

50 大副之吳刀、是用出禹。

※『初學記』卷二二(王嚴洪馬)

51 金水之子其名曰羽蒙。乃占之曰、「羽民是生百鳥」。

※『文選』卷一三注(嚴洪林馬)・『太平御覽』卷九一四(王嚴洪馬)

52 鍾山之子。

※『山海經』西山經注(王洪)

53 蚩尤出自羊水、八肱八趾疏首。登九淖以伐空桑、黃帝殺之於青  
丘。

※『初學記』卷九(王嚴洪林馬)・『路史』卷一三注(馬)・『路史』

卷一三(嚴)・『路史』卷一三後紀四注(嚴洪)

(分類不明)

54 借者起起舜臣之名射舜而賊其家、反有其奴奴子也。

※『玉燭寶典』卷一注

55 離處彼南方與日月同鄉。

※『玉燭寶典』卷五

56 有鳧鴛鴦、有鴈鸕鷀。

※『芸文類聚』卷九二(嚴洪林馬)・『太平御覽』卷九二五(嚴洪馬)

・『爾雅翼』卷一七

57 鼎有黃耳、利得鱧鯉。

※『芸文類聚』卷九九(嚴洪林馬)・『四六標準』卷三六注

58 大昊之盛、有白雲、出自蒼梧入于大梁。

※『太平御覽』卷八七二(嚴洪)・『不知名類書甲』(P三六三六)・

『初學記』卷一(嚴洪)・『芸文類聚』卷一(王嚴洪林)・『文選』卷

二〇注(嚴洪)・『北堂書鈔』卷一五〇(馬)・『白氏六帖』卷二

(嚴洪)・『義楚六帖』卷一七・『歲華紀禮』卷二・『太平御覽』卷八  
(嚴洪)

59 上有高臺、下有離池。以此事君其貴、若化若以賈市、其富如河漢。

※『太平御覽』卷四七二(嚴洪馬)

60 有人將來、遺我貨貝。以至則徹、以求則得、有喜則至。

※『芸文類聚』卷八四(嚴洪林馬)・『太平御覽』卷八〇七(嚴洪馬)

61 有人將來、遺我錢財、日夜望之。

※『太平御覽』卷八三五(嚴洪馬)

62 穆王獵于戈之野。

※『太平御覽』卷八三一(王嚴洪馬)

63 剥。良人得其玉、小人得其粟。其玉亦瘦、其粟亦沙。

※『太平御覽』卷八四〇(嚴洪馬)・『秘府略』卷八八三

64 乾者積石風穴之琴。亨之者弗亨、終身不瘳。

※『北堂書鈔』卷一五八(嚴洪)

65 瘳痺、厲之疾也。

※『一切經音義』卷一六

66 崇在司命也。

※『一切經音義』卷七八・卷八二

67 君子戒車、小人戒徒。

※『文選』卷二注(嚴洪林馬)

68 東君・雲中。

69 天子駕六馬。  
※『史記』卷一八封禪書索隱(嚴馬)

70 乾有乾大赤、乾爲夫、爲君、爲父。又爲辟、爲卿、爲馬、爲木。又爲血卦。

※『尚書說』卷七

71 啓母在此山、化爲石而子啓亦登仙。

※『漢上易叢說』(馬)・『路史』發揮(嚴洪林馬)

72 昔者夏后開使蜚廉折金於山川、而陶鑄之於昆吾。是使翁難雉乙卜於白若之龜、曰、「鼎成三足而方、不炊而自烹、不舉而自臧、不遷而自行、以祭於昆吾之虛、上鄉。乙又言兆之由曰、「饗矣。逢逢白雲、一南一北、一西一東、九鼎既成、遷於三國。」

※『墨子』耕柱(林)

注

(1) 唐・孔穎達『周易正義』卷一第三論三代易名に「鄭玄『易贊』及『易論』云、「夏曰連山、殷曰坤藏、周曰周易」とある。

(2) 張心徵『偽書通考』(商務印書館、一九三九年)をはじめ、王冠英等主編『中国偽書綜考』(黃山書社、一九九八年)、劉建國『先秦偽書弁正』(陝西人民出版社、二〇〇四年)などの研究はいずれも「坤藏」を偽書とする。

(3) 発掘簡報は荊州地区博物館「江陵王家台十五号秦墓」(『文物』一九九五年一期)。出土した竹簡の詳細については、王明欽「王家台秦墓竹簡概述」(新出簡帛國際學術研討会発表、於北京、二〇〇〇年八月二日)がある。

この発表原稿はのち『新出簡帛研究』（文物出版社、二〇〇四年二月）に収録されている。ただしここに掲載された釈文は整理段階のもので、正式な釈文・図版はまだ公開されていない（二〇〇六年九月現在）。

また「易占」と「帰蔵」の関係について論じたものに、  
王明欽「試論『帰蔵』の幾個問題」（『一劍集』所収、中国婦女出版社、一九九六年）

連劭名「江陵王家台秦簡与『帰蔵』」（『江漢考古』一九九六年四期）  
李家浩「王家台秦簡「易占」為「帰蔵」考」（『伝統文化与现代化』一九九七年一期）

王寧「秦墓「易占」与「帰蔵」之關係」（『考古与文物』二〇〇〇年一期）などがある。

(4) 発掘簡報及び王明欽前掲論文注(3)によると、王家台一五号秦墓からは八一三片の竹簡(残簡含む)のほか一枚の竹牘が発見されている。字跡が不明確なためか、その釈文はまだまだ明らかでないが、銀雀山・双古堆から出土した木牘のように、竹簡の篇名などが記されていた可能性もある。

(5) 『太平御覽』卷六〇八引。  
(6) 『北堂書鈔』卷一〇一引。

(7) 董俊彦「桓譚研究」(文史哲出版社、一九八六年)、附録「桓子新論校補」の分類によると、この二文は正経篇のものとされる。

(8) 『統漢書』天文志上劉昭注引。

(9) 王明欽前掲論文注(3)によると、「易占」に「歸妹曰昔者恒我竊母死之」……□□帝月而支占□□□□……とある(原文簡体字)。文中の「枚筮」(支占・枚占とも)の語は『帰蔵』に特徴的に見られるもので、文の構造も酷似している。

(10) 近藤浩之「王家台秦簡『帰蔵』初探」(『中国哲学』第二十九号、二〇〇〇年二月)および近藤浩之「王家台秦簡『帰蔵』の研究」(郭店楚簡研究会編『楚地出土資料と中国古代文化』汲古書院、二〇〇二年三月)。

(11) 程二行・彭公璞「『帰蔵』非殷人之易考」(『中国哲学史』二〇〇四年二

期)。

(12) 『晉中經』は魏・鄭默『中經簿』を藍本とし、晉初に荀勗の手によって編纂された宮中の蔵書目録である。『中經新簿』ともいう。

(13) 文中の「聞本」とは明・閩人詮の覆宋本を、「沈本」とは清・沈翰による校訂本を指す。

(14) 「不知名類書甲」の分類、釈文などについては王三慶『敦煌類書研究』(麗文文化事業、一九九三年)を参考にした。

(15) 卷二は「連山」に関するものであるが、「連山」「帰蔵」両者に関連するものはこちらに記述されており、参照する必要がある。

(16) 以下は真偽問題に言及した部分を抜粋したもの。原本に出典は明記されていないが、出典と思われる箇所を文末の括弧内に補った。なお原本と出典で文に異なる場合、出典に従った。

(17) 出典は清・徐善『徐氏四易』と思われるが、当該書は国内の所蔵が確認できず、未見である。

(18) 近藤浩之前掲論文注(10)。

(19) 『周易正義』第三論三代易名に「杜子春云、連山、宓戲。歸蔵、黄帝」とある。

(20) 『周易正義』第三論三代易名に「案『世譜』等羣書、神農一日連山氏、亦曰列山氏。黄帝一日歸蔵氏」とある。『世譜』については詳細不明だが、漢志に「帝王諸侯世譜」二十卷」とあるものがそれか。

(21) 清・梁玉繩『漢書人表考』に「列山氏：(中略)：歸蔵氏 案列・烈・臧・藏字通。先儒皆以列山・歸蔵爲炎・黃別號。則二氏重出矣。但『禮』祭法疏引『命麻序』曰、「炎帝八世、黄帝十世」。安知列山非炎帝初封侯國之號。後爲天子、別以支屬襲封乎。又安知歸蔵非炎帝初封黃帝爲諸侯之號」とある。

(22) 「歸蔵氏」はもと「烈山氏」に作るが、清・孫詒讓『札迻』論衡校文に従い改めた。

(23) 緯書としての『河図』の成立については、安居香山・中村璋八『重修緯

書集成』卷六（小林日出夫、一九七八年）、一一～二八頁を参照。

- (24) このことに關する古典的な議論として、『周易正義』序「第二論重卦之人」がある。

- (25) 邢文「秦簡『帰蔵』与『周易』用商」、『文物』二〇〇〇年二期、同氏『著平竹帛』蘭台出版社、二〇〇五年六月に再録、林忠軍「王家台秦簡『帰蔵』出土的易学價值」、『周易研究』二〇〇一年二期、梁韋弦「王家台秦簡「易占」与殷易『帰蔵』」、『周易研究』二〇〇二年三期。

- (26) 附、『帰蔵』佚文輯校の佚文1～7を参照。

- (27) 以下に、『帰蔵』の佚文を輯録した。まず諸佚文を校勘した本文を掲げ、※以下に出典を挙げ、先行する輯本がすでに採録しているものには、その略号を記した。その略号は

王 清・王謨『漢魏遺書鈔』経翼

嚴 清・嚴可均『全上古三代文』卷一五

洪 清・洪頤煊『經典集林』卷一

林 清・林春溥『古書拾遺』卷一

馬 清・馬国翰『玉函山房輯佚書』経篇易類

であり、略号のないものは、筆者が新たに集めた佚文である。『玉海』『経義考』なども佚文を載せるが、出典が明示されていないため、ここでは用いなかった。なお、『帰蔵』佚文のデータベースを

<http://ushio.kawamura.jp/database/>  
に構築した。あわせて参照されたい。

- (28) 四庫全書本『西谿易說』は遼・大壮・蜀・馬徒の四卦を欠く。元・胡一桂『周易本義啓蒙翼伝』の引用文により補った。